



日本の岐路

令和6年10月10日

黒田インターナショナル コンサルティング LLC

黒田 毅

安全保障と国際情勢、国家の隷属性における自己決定の喪失、財政問題、世界の新たな現実への遅れなど、全ての現実が競争原理において存在する世界において、日本は今日その岐路に自己を有する。

しかし未来における約束は存在するのである。それは新たな技術文明である。危機感の共有と今日の変化は、新しい未来という現実を実現できるのである。

これらは既存社会インフラの整備における新しい基準など、次世代への転換を、ゼロエミッション、サーキュラエコノミーへの転換とともに提案するものである。

これらは国際情勢が、新たな対立を有することに足して、自己の自立と独立への回帰は、独自外交における世界への自己プレゼンスの構築を可能とできるのである。

既存過去という原始性は、今日技術と学術の進歩における未来を模索しているのであり、これらは西洋の理知主義が、新しい未来を模索していることを認識しなくてはならない。

これらは既存価値観の崩壊が、産業革命とともに存在するためであり、政治はこれらをリードすることで未来の実現を可能とできるのである。

これらは既存価値観から新しい未来という変化が存在することを留意すべきである。これらが西洋の自由主義における新しい未来の模索であることは理解すべきである。

これら未来という約束へ、明確に自己の混戦作の構築や新しい理解の共有を求め国家の作新を行うことは未来への適合性を行うことなのである。

また既存システムは旧癖であり、未来に適合しないことは、新たな国家運営と社会システムへの転換を明確に求められるものである。

これらは学術性の新たな要求であり、大学や教育の転換と新たな要求への適合は、未来という必要性への正しい変化なのである。